

「産業革命」以前

環境委員会 専門員

さくらい としお
櫻井 敏雄

本年4月、国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、第5次評価報告書第3作業部会報告書を公表した。第3作業部会は、温室効果ガスの排出の抑制・削減（気候変動の緩和）のための政策等に関する評価を行っており、同報告書によれば、気温上昇を産業革命前に比べて2℃未満に抑えられる可能性が高い緩和シナリオでは、2010年（平成22年）の世界の温室効果ガス排出量と比べて、2050年（平成62年）の排出量を40～70%削減するとしている。

産業革命は18世紀半ばに英国で始まり、それ以降、人間活動による化石燃料の消費が急増するとともに、森林の減少などによって大気中の温室効果ガスが増加し、地球温暖化が進んだと考えられている。

産業革命は「近代化」の経済的側面と捉えることができ、現代に連なるものと考えられるが、産業革命以前の社会や民衆の生活は、現代の我々にとって縁の遠いものとなっている。ここで、産業革命以前の英国の人々の暮らしについて、簡単にみてみたい。

産業革命以前の英国では、貴族や地主といった人々は生産に従事せず、労働を賤しいものとみなしていた。生産に従事するのは人口の大部分を占める農民であり、その生活の場は農村共同体が中心であって、衣食住はほぼ共同体内で調達できた。農村共同体での生活は自然循環の中で営まれ、余剰生産物が生じた場合は、これを自然循環を破壊しないような形で蓄積するか、働かない時間を増加させることによって処理していたという。つまり、今までと同じように食べ、飲み、着ることができれば、それ以上の労働を行うよりは休んでしまうという行動様式であった。

燃料は主として薪・木炭が用いられていたが、16世紀半ばには深刻な木材不足を生じ、次第に石炭が使用されるようになった。石炭の需要が高まるにつれて、採炭のための技術の向上及び動力の強化が求められ、蒸気機関の発明へとつながっていくことになる。

産業革命の進展に伴い工業が発展して、英国は「世界の工場」として繁栄する。他方、農民が工場労働者として都市に移動するなどして、農村共同体は崩壊した。共同体から独立した個人は衣食住等すべてを賃金収入でまかなうことになり、節約と勤勉が美德とされる経済倫理が定着した。

こうしてみると、産業革命は英国の人々の暮らしを大きく変えたことが分かる。そして、その変化は、ヨーロッパ各国、アメリカ大陸、ロシア、日本等へと波及していった。産業革命後の工業化の拡大によって、化石燃料の消費がいかに加速度的に増加していったかが推察されよう。

産業革命以前に利用されていたのは、風力、水力、バイオマス等であった。これらは現在、再生可能エネルギーとして温室効果ガス削減に向けて普及が期待されている。3世紀の時を隔ててこれらのエネルギーが注目を浴びることに、感慨を深くするものである。